



●本の紹介「きれいな色とことば」

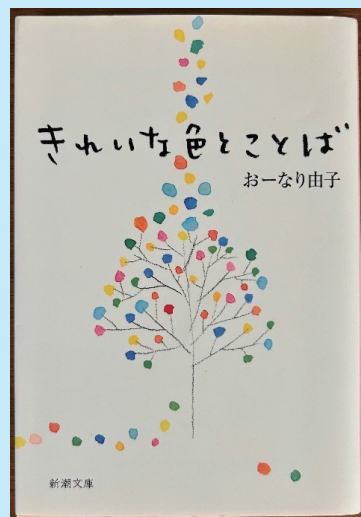
【著者】おーなり由子【出版社】新潮文庫

【出版年月日】2002/7/1

著者は絵本作家・漫画家・エッセイスト。日常の中にある「色」を通して、心の機微や思い出を描いている。

ここ最近の暑さしのぎに清涼感を味わえるエッセイである。懐かしい香りに心地よい風が通るような淡く、優しいことばがしみじみと心に響く。

『色の名前』の頁に DIC カラーガイド日本の伝統色・フランスの伝統色・中国の伝統色について、「色ごとにその由来も書かれていたりするから、読んでてもすごく楽しい」とある。うーむ、納得。（幹事：渡邊裕美）



●JIS Z8102 物体色の色名・慣用色名

慣用色名については、付表の形のページ構成になっており、その「色名1」は、漢字あるいは平仮名表記の色名が147種類集められており、例えば「とき（鴉）色」に始まる慣用色名の、「読み方」、「対応する系統色名と略記号」、「代表的な色記号（色相・明度・彩度）」が列記されている。

「とき（鴉）色」定義の内容について列举すると、慣用色名「とき（鴉）色」、読み方「ときいろ」、対応する系統色名「明るい紫みの赤」、略記号「lt-pR」、代表的な色記号「7RP 7.5/8」となる。

「色名2」は、日本で慣用化した外来語の色名が、122種類が選ばれていて、カタカナ表記されてまとめられており、「対応英語」の後ろに、「対応する系統色名と略記号」、「代表的な色記号（色相・明度・彩度）」が列記されている。

これらの慣用色名に関する情報は、小学館文庫の「JIS 規格・物体色の色名・日本の269色」という文庫本として出版されており。電子本の形でも入手できる。この中には、全色のCMYKの値が示されているので、出版や、色彩教材の制作にあたり、利用すると便利である。

（永田泰弘）

●日本の伝統的な色名・縹

色の中で、縹（はなだ）は、歴史上、日本人の着物の色として最も多く使われてきた色と考えられる。

縹に染める藍染に使う蓼藍は、遣唐使によって渡来した植物と考えられており、縹は藍の単一染めの色で、純正な青色とも言え、青の古名であり、現代の基本色名に該当する。

古代より青は緑色も指し、その名残は、青葉や青信号の言葉として残っている。縹系の色の濃淡は、藍染の工程で、糸の束を何度、藍甕（あいがめ）に漬けて引上げ空気に晒して酸化を進めることによって濃さをまして行きその回数によって色の濃さと色名が決まっていく。

藍染の濃淡を縹系の色名表現で並べてみると、濃い色から、褐（かちん・勝色）紺、深縹（こき縹）、中縹・浅縹（うす縹）、白縹、変相した色名だと、深藍・中藍・浅藍・花染（花田色・花色）秘色（ひそく）などと並ぶ。

蓼藍は、中国から日本に6世紀頃に伝わり、藍色の染料を採るために広く栽培され、江戸時代に阿波国（徳島県）で発達し、阿波藍となったが、ドイツで人工藍の工業化が成功し、20世紀に入り化学染料に置き変わっていった。

（永田泰弘）